

令和6年度第1学期始業式式辞

おはようございます。先週の土曜日に中学校入学式が行われ、新たに穎明館43期生193名を迎え、令和6年度、新年度を全学年そろってスタートします。穎明館生の皆さん、希望の春、やる気が湧いてきませんか。今日は新年度の始まりにふさわしい呼びかけをしたい。題して、「穎明館生よ、教養人たれ」。

まずは、皆さんにこれからの社会や教育を考える3つのキーワードを示し、そこから「教養人としての学び」のお話をしたいと思います。3つのキーワード、それは、「ウェルビーイング」、「シンギュラリティ」、「VUCA」です。いずれもあまり聞きなれない言葉かもしれませんが。頑張ってみてよく聞いてみて下さい。

第1の「ウェルビーイング」とは、「well（よい）」と「being（ある）」が組み合わさった言葉で、心身ともに満たされた状態を表す概念です。単に「幸せ」とも訳されますが、「happiness」が一時的な幸せの感情を指すのに対して、満たされた状態が持続する意味合いがあるといっただけでしょう。それでは幸せとは何でしょうか。お金でしょうか。GDP（国内総生産）を増やすということでは、第二次世界大戦後、日本は高度経済成長を成し遂げました。それでも「GDPは幸せを示す指標ではない」と、豊かさをなかなか実感としてもてないまま歩んできたとも言われます。これからの日本の課題は、個人と社会の幸福を最大化することが第一ではないか。そのために教育も変わらなくてはならない。教育は皆にとっての幸せを生み出す力、新たな価値を創造する力、責任ある行動をする力を育てるものにならなければならない、と言われていています。

例えば、皆さんが学校行事、文化祭などの準備を進める時に、対立やジレンマに陥ることがあるでしょう。板挟み、想定外、修羅場はよい経験です。乗り越えた時の「ウェルビーイング」を実感してほしいものです。

第2の「シンギュラリティ」は、「技術的特異点」などと訳されますが、AI（人工知能）が人間の知能を超えるようになる転換点を示します。「シンギュラリティ」の到来はいつか、ということには諸説ありますが、西暦2045年という予測が強いようです。昨年、2023年はチャットGPT（生成AI）の話題が大きく取り上げられましたが、仕事、職業がAIに代替される時代に入ってきています。2014年にオックスフォード大学のマイケル・オズボーン教授が、「20年後に現在ある仕事の47%がなくなる」と結論付けて早、10年が経ちました。

加速度的な技術革新（イノベーション）の下で、学校、教育現場において私たちはどうしたらいいのでしょうか。私はいつも思っています。「AIに西田幾多郎の『純粹経験』は扱えない。身体性のある探究活動、体験学習は今まで以上に大事になる」と。

生徒の皆さんの立場では、「何か夢中になるものを見つける」、「夢中になる力を育てる」ということが大切です。その意味で「探究」にしっかりと取り組んでください。皆さんそれぞれの問題意識を深める「探究学習」が、全ての「教科学習」を後押ししてくれるはずです。それから西田幾多郎の『善の研究』は難解ですが、古典的名著です。挑戦してみましょう。

第3のVUCAとは、「Volatility」（変動性）、「Uncertainty」（不確実性）、「Complexity」（複雑性）、「Ambiguity」（曖昧性）の頭文字をとった言葉です。4つが示す通り、「明日何が起きるかわからない、予測不可能な時代」を意味します。近年の「コロナ禍」や、「ウクライナ紛争」などを考えてみればわかるでしょう。過去の経験で、ある程度予測できたことが想定外で予測できず、考えもつかない事態に進んでいくわけです。VUCAは、もともとは軍事用語で、その後ビジネス界をはじめ、社会に広まりましたが、悪い意味ばかりではありません。未知との遭遇ということでは、思いもよらないリスクはあるものの、思いがけないチャンスをつかむことだってあります。それではVUCA（予測不可能な時代）にあって、私たちは何をどう学んだらいいのでしょうか。

まずは「ICT」（情報通信技術）です。常に情報収集、活用を意識する。今度の大学入試は新課程入試となり、多くの国立大学で科目「情報Ⅰ」の共通テスト受験が義務付けられます。このことは単に受験にとどまらず、大学も企業社会も情報収集、活用の重要性を受け止めている証です。6年生はもちろん、各学年で大学受験を意識しましょう。大学受験に挑む中で、VUCAにあって求められる、変化に臨機応変に対応する力や、スピーディーな判断力を身につけることができます。そこでは当然、自主的かつ自律的な学習姿勢が求められるのです。

さて、穎明館生の皆さん、「ウェルビーイング」、「シンギュラリティ」、「VUCA」と3つのキーワードに基づく話はどうでしたか。ずっと腑に落ちるといふ人は、中学生高校生としては教養があると言っていいでしょう。「よくわからない」、「もっと教養を身につけたい」といふ人は、日頃から本を読んだり、新聞を読んだりして、社会や世の中の出来事に関心を持って、考える習慣を身につけることから始めてみてください。

もっとも私の考える「教養人」とは、単なる物知りではない。例えば偏差値は高いに越したことはないが、それだけでは不十分です。幅広い知識に基づいて、思慮深く行動できる人、すなわち精神的に豊かで、穏やかに他者との関係が築ける人こそ「教養人」です。例を一つ、私の大学時代の後輩が大企業の取締役をやっている、先日、話を聞く機会がありました。

「とある商談の最中にいきなり靴を脱いで、ひれ伏すように頭を地面につけて、とある方向（メッカですね）を向いて礼拝を始めたので大変驚きました。敬虔なムスリムとすぐにわかったので、礼拝の後に、イスラムについて、そして日本人の宗教観について話しあいました。もともと文化や宗教には関心を持っていて、話が弾み、商談もうまくまとまりました」。

実はこの後輩というのは、初めからその大企業に就職したのではなく、関連会社に勤務していたところ、個人としての業績、活躍を認められ、ヘッドハンティングされて、取締役にまでなった人です。話も興味深いし、人間的に魅力のある面白い人物です。

グローバルな社会において、文化・宗教が異なる人と交渉事をうまく進めるのは、簡単なことではありません。人間力、教養力がバックボーンになれば、薄っぺらな人間としてしか評価されず、信頼関係も築けないでしょう。

「穎明館生よ、教養人たれ」——私の言わんとすることは伝わっていますか。それならば穎明館生、皆さんはどうすればいいのか。それは、自らの知的好奇心を妥協なく追求し、本当の学力を身につけ、人間力を磨く努力を続けることだと思います。まずは全ての授業に集中して臨み、放課後の活動にも積極的に参加する。とことん熱中してみてください。そして自分の好きな学びや強みとなる分野を生み出す。皆さんならばきっとできる。令和6年度のスタートに当たり、お互いに誓いを立てようではありませんか。

式辞の結びは、創立者堀越克明先生の定めた校訓とモットーです。創立者はまさに教養人、私の憧れ、目標でもあります。堀越克明先生のように、知性と教養に裏打ちされた品格を身につけたい。私も精進します。

さて6年生、38期生の皆さん、いよいよ受験学年になりました。「穎明館の受験生よ、教養人たれ」——受験勉強を通じて、もちろん教養は身につきます。自分自身の可能性を信じて、貪欲に知識・教養を身につけ、強気で挑戦する1年にしましょう。そしてその頼もしい姿を後輩の皆さんも見習ってってください。

穎明館生の皆さん、今年度も校訓、モットーを胸に、常に目標、意識を高くもって努力することを期待します。

【校訓】

「 人生は何ごとに依らず その目標は高く設定すべきである
その推進には 高い知性と理性を必要とする 」

【モットー】

「 仁智は無窮 穎才を研きよき地球人たれ 」

以上、令和6年度第1学期始業式式辞といたします。